世界初デジタル最新技術で原寸大に再現

至宝『日本の絵巻物』完全復刻シリーズ

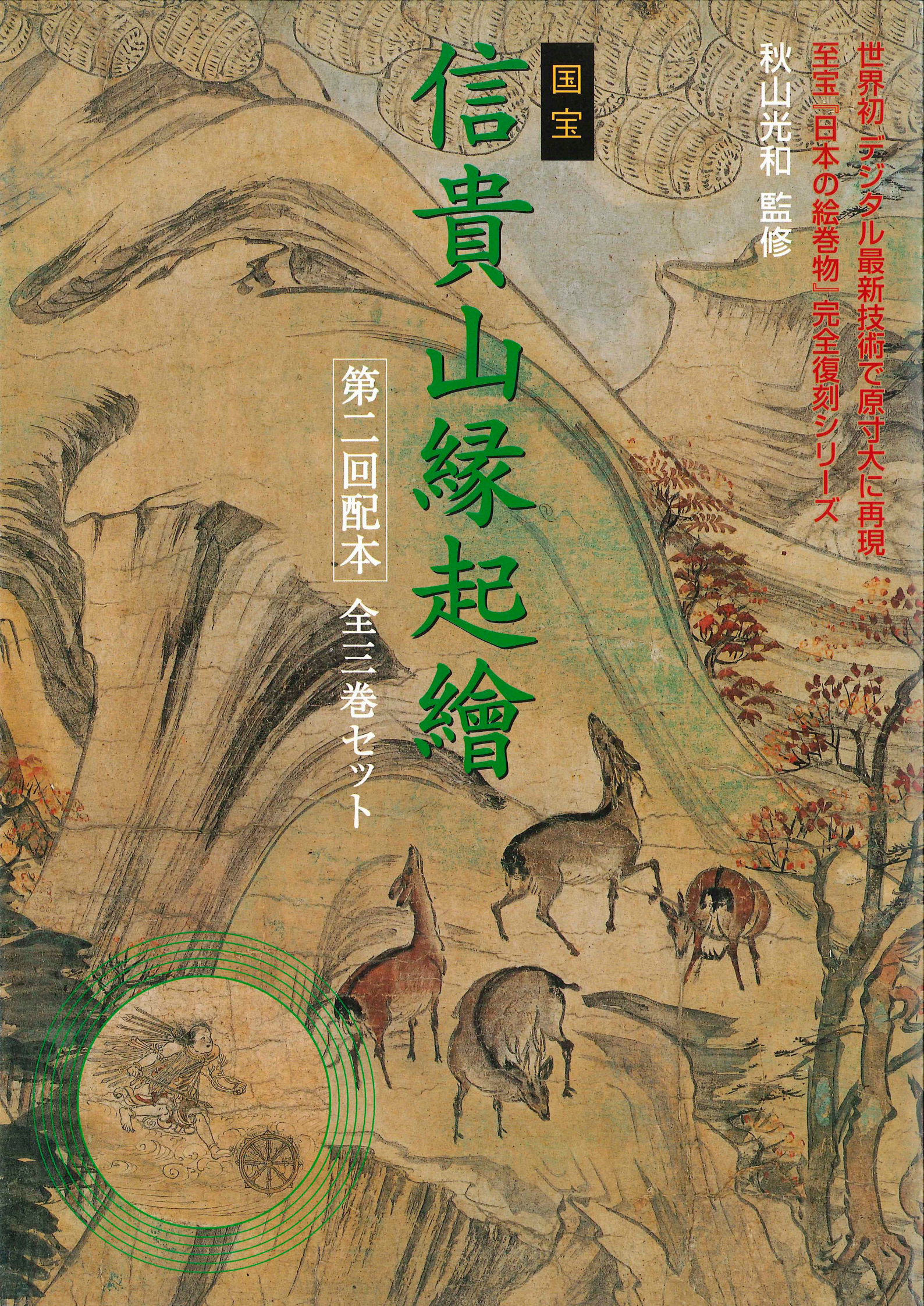
秋山光和 監修

国宝

信貴山縁起繪

第二回配本

全三巻セット



刊行のことば

村田誠四郎　丸善株式会社　代表取締役社長

絵巻物は日本が生んだ特有の美術様式で、詞書と絵によって展開するその独特の世界は、美術史的にも文学史的にも宗教史的にも風俗・生活史的にも貴重な存在です。

絵巻物はまた、絵と文章による複合芸術であり、時間性とストーリー性をもった絵画です。それは、今日隆盛をみているマンガ、アニメーションの源流ともいうべきもので、絵巻物はきわめて現代的な興味の対象でもあります。とりわけ「異時同図法」「吹抜屋台」といった表現方法は、マンガやアニメーションの表現法の先駆をなし、コンピューターグラフィックスの映像表現にも影響を与え、世界的にも注目を集めているところです。

絵巻物は、美術館、神社仏閣、大学、個人等において貴重な美術品として厳重に保管されており、特別陳列を除けばほとんど公開・展示されることがありません。特別陳列も海外において開催されることが多く、国内ではその機会に乏しいため、さまざまな観点から鑑賞されるべき絵巻物にふれることは事実上ないに等しいのです。学術用として、鑑賞用として、より身近に、手にとれる原寸大の複製品あるいは復刻品が大いに求められるところです。

戦前から一部の名作絵巻物の複製・復刻はなされていますが、モノクロ図版や縮小版が多く、学問研究や美術鑑賞に耐えるものではありませんでした。また、多くの場合、冊子本のかたちで紹介されており、左手で開き、右手で巻きながらストーリー展開を追い、かつ鑑賞するという、絵巻物本来の醍醐味が失われておりました。

このたび、最新のデジタル技術を駆使して豊かな絵巻物の世界を再現する、日本の絵巻物・原寸大復刻シリーズを刊行する運びとなりました。筆遣いの息吹さえも感じさせる高いクオリティの復刻と、巻物を開き広げ巻き込みながら鑑賞できる巻子本により、絵巻物の神髄を伝えることができるものと確信しております。

二十一世紀を迎えた今日こそ、日本独自の文化遺産である絵巻物を完全に復刻する好機と考え、新しい文化事業として、当社の全力を挙げて刊行してまいります。

六大特色

代表的絵巻物を網羅

美術ならびに歴史の分野において専門書や研究書、あるいは大学・短大の教科書・教材において掲載度の高い国宝クラスの絵巻物を選んで復刻。

高品質な印刷

最新のデジタル印刷技術と日本の伝統的な職人芸の融合により、内容豊かな絵巻物の世界を忠実に再現。

優れた印刷効果と耐光性

バガス紙（中性紙）と耐光性の強いトナーを使用することにより、従来にないインクのテクスチュアと抜群の色彩効果を実現。半恒久的な保存が可能。

「貼りつなぎ」なし

世界初の絵巻物用画像つなぎソフト（トッパン・フォームズと三洋電機との共同開発）により、何メートルにもわたる絵巻物を一枚の用紙に同時印刷することが可能に。実物にもない視覚効果と機能性を実現。

実物と同じ巻子本

原物を忠実に再現しているので、左手で巻き広げ、右手で巻き込みながら鑑賞する絵巻物本来の楽しみ方を実現。

詳細な解説書付き

それぞれの美術館の学芸員、専門の美術史家による解説。歴史資料文献としての価値も多大。

監修者のことば

秋山光和

日本の美術にとって、絵物語・物語絵などと呼ばれたいわゆる絵巻物が、大きな役割を果し続けたことはいうまでもあるまい。

「画巻」と呼ばれたこの形式が、他の諸文化と同様中国からもたらされたことは勿論であるが、すでに平安時代初期、九世紀末にはまず中国の物語を和文化した「長恨歌の絵巻」などが作られている。また日本での各種の説話や伝承を絵画化し、詞に絵を続けて絵巻の形としたものが作られたことは、二人の男に求婚された末、生田川に身を投げて自ら命を断ったという生田川処女（菟原処女）の哀話を絵画化し、さらに見る者がこれに歌を添えた由を記述した「かかる事どもの昔ありけるを、絵にみなかきて、故后の宮（宇多天皇中宮、八七二―九〇七）に奉りたりければ」とある『大和物語』の一説からもうかがわれる。

この九世紀末から十世紀にかけての物語絵の内容を大別すれば、『竹取物語』のような民間伝承を母体としたものと、『落窪物語』『うつぼ物語』など創作的な主題によるものとに分けて考えることも出来よう。そしてかの『源氏物語』「絵合」の巻には源氏方の『竹取物語』絵巻に対し、弘徽殿方からは新造した『うつぼ物語（俊蔭の巻）』が提出され、それは飛鳥部常則が絵を描き、能書家として知られる小野道風が詞を書いたことまで記されている。

そのほか『土佐日記』の絵、『住吉物語』の絵なども十世紀の文献にはさまざまに見ることが出来る。なお現在では詞しか伝わらないが、永観二年（九八四）にすぐれた文人源為憲が冷泉天皇の皇女尊子内親王の為に仏教に関係ある説話を集めた「三宝絵」も当初はかなり複雑な物語を絵画化した絵巻であったと推定しうる。

一方、私達が床（当時は置畳）の上で絵巻を拡げて鑑賞する際、左右の手の間隔は八〇センチ前後が適当と思われる。

この点をよく示している絵巻の例は、十三世紀初めに高山寺で作られた「華厳宗祖師絵」六巻であろう。新羅の僧元曉と義湘が龍の助けによって荒海を渡り中国に渡る物語であるが、場面の変化はほぼこの長さに対応している。

また現存の絵巻では最古と思われる『源氏物語絵』にしても、すでにこの物語が紫式部と呼ばれる宮廷女房によって創作された十一世紀初頭には彰子中宮の為に絵巻化されていたかとさえ推定されている。

現存のこの絵は保存のため詞と絵の境目に当る紙を巧みに分離し、桐箱に納めて徳川美術館と五島美術館とに保存されている。しかしその総量はほぼ当初の四分の一と考えられ、その他に詞のみの断簡十種ほどと、江戸初期に一部補修しつつ切断された「若紫」の図を挙げることが出来る。

何れにせよ、最初に刊行される『平治物語絵』をはじめ、『源氏物語絵』以下『信貴山縁起絵』、『伴大納言絵』など重要な絵巻類が原寸原色の巻子形式で復刻発行されるという企画は、私にとっても何よりの欣びであり、美術の研究者並びに愛好家への貢献といわねばなるまい。

秋山光和（あきやま てるかず）

大正７年（1918年）京都市に生まれ、間もなく父祖の故地東京に移る。
昭和16年東京帝国大学文学部卒業、文学博士、東京国立文化財研究所を経て東京大学文学部教授。
昭和54年学習院大学教授。専門は日本の古代中世美術史であるが、中央アジア、敦煌絵画をも研究。

東京大学名誉教授
日仏会館副理事長
フランス学士院客員会員
ブリティッシュ・アカデミー客員会員

主な著書に
『平安時代世俗画の研究』（1964年 吉川弘文館）、『王朝絵画の誕生』（1968年 中央公論社）、『絵巻物』（1975年 小学館）『日本絵巻物の研究（上下）』（2000年 中央公論美術出版）、“La Peinture Japonaise”（1961年 スイス・スキラ書店、英・独語版も同時刊行）など。

絵巻物と『信貴山縁起繪』について

絵巻物には、大別して宗教的なものと世俗的なものがあります。宗教的なものには、ほとんどが仏教説話に基づいた説話ですが、分類すると経典図解、装飾経、寺社縁起、高僧伝のほか、今昔物語などの仏教説話の中の逸話によった説話画があります。『信貴山縁起繪』は中でも優れた仏教説話として、昭和二十六年に国宝に指定されています。

絵巻という形式自体は、古代中国ではじまり、奈良時代の八世紀にわが国に渡来したものですが、十世紀のはじめにはすでに冊子絵などの物語絵が発生しています。平安時代の十二世紀の前半には、われわれの祖先はその形式にさまざまな工夫や潤色を凝らして、絵巻というわが国特有の新しい表現形式を生み出しました。絵と詞書の巧みな組み合わせがその一例ですが、それがまた従来になかった創造的な画面構成や絵画技法を生み出すという、世界の美術史上に類のない美的世界へと発展していったのです。

現在、奈良県信貴山の朝護孫子寺が所蔵する『信貴山縁起繪』は、十二世紀後半につくられた絵巻で、国宝『源氏物語繪』とならんで、われわれの祖先から伝えられた日本美術の最高傑作のひとつといわれています。その内容は、十二世紀前半にできた『古本説話集』に載っている説話に基づいていますが、朝護孫子寺の縁起、つまり寺の起こりをも説いたものでもあります。

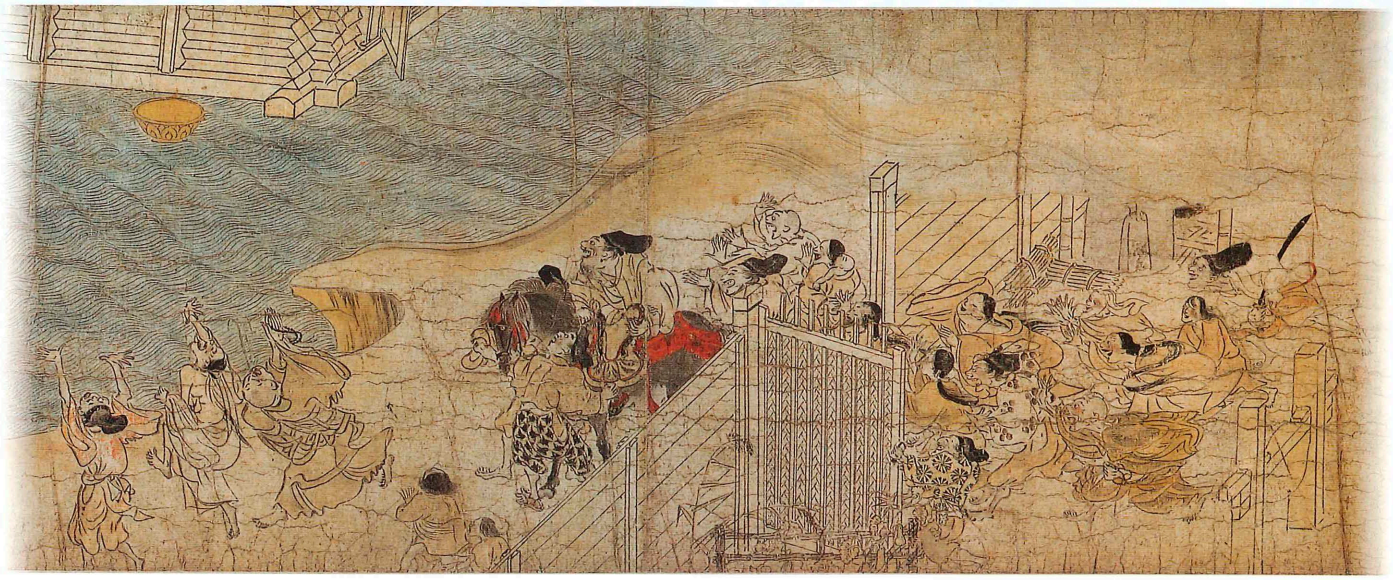
「源氏の静から信貴山の動へ」といわれているように、『源氏物語繪』がわが国で生み出された「つくり絵」と呼ばれる独自の絵画様式の静的傑作とすれば、『信貴山縁起繪』は平安時代の物語や説話を絵画化した動的傑作の代表作といえます。さらに、日本美術史上で『源氏物語繪』が「色の芸術」、『信貴山縁起繪』が「線の芸術」と性格づけられていますが、線描のすばらしさと同等に、この絵巻には豊麗な色彩が全巻にほどこされているのも注目すべきことです。

『源氏物語繪』の特質が、絵と文字が調和のとれた画面の「美しさ」とすれば、『信貴山縁起繪』のそれは画面の「面白さ」です。物語そのものは古いむかし話ですが、そこに描かれた人物の動きや表情、効果的な風景表現、次々に起こる事象の表現と内容は現代人の心をとらえてやみませんし、ストーリーを目で追ってゆくうちに、知らぬ間にその世界に引きこまれてしまいます。そこには、奇想天外な描写、絵師がつくり出す時間の推移や空間の変化のドラマがあり、今日のアニメーションやマンガに共通する面白さがあります。巻子を右から左へとひろげてゆくにつれて画面の変化があり、まさに絵巻という形式でなければ味わうことのできない世界がくりひろげられています。

『信貴山縁起繪』のもうひとつの特色は、それ以後の絵巻と比較して、詞書が少ないということです。絵がひとり歩きして、説明は不要としているかの感さえします。それほどに画面から画面への変化がスムーズになされ、テンポよく処理する画法は、絵師の驚くべき腕前といわざるをえません。この絵巻をひもとき、連続する画面のなかに虚心に見入ってゆけば、そこにはわれわれ現代人のこころをも魅了せずにはおかない、深い絵画的感動があります。

朝護孫子寺（ちょうごそんしじ）

奈良県生駒郡の信貴山にあり、信貴山真言宗の総本山。本尊は毘沙門天で、587年に聖徳太子が物部氏征伐の途上にこの山で勝利祈願をしたことが当寺の起源と伝えられている。一時は荒廃していたが、10世紀初頭の延喜年間に命蓮によって再興。1577年の織田信長による松永氏の信貴山城攻めの際に寺は焼失したが、豊臣秀頼により再建。江戸時代以降は金剛峯寺末寺であったが、1951年に信貴山真言宗として独立。境内には懸造の本堂、朱塗りの三重塔、多宝塔などがあり、毘沙門天の霊験による福徳開運の山として信仰されている。国宝『信貴山縁起繪』のほかに、武具甲冑類、金銅鉢など多数の文化財の所蔵でも有名。縁日の寅の日には参詣者でにぎわう。



第一巻 山崎長者の巻

天地三十一・七センチ、全長八九七センチメートルのこの第一巻は、最初から最後まで一行の文字もなく、すべて絵で構成されています。当然のことながら、もともとは巻頭に詞書があったはずですが、現存する絵巻には欠失しています。板囲いをめぐらした大きな家と人びとが立ち騒いでいる最初の画面は、一気にわれわれの視線を物語の世界へと導いてくれます。

詞書はなくても、平安時代の説話集『古本説話集』や、のちの鎌倉時代に編纂された『宇治拾遺物語』に納められている話がこの絵に相応することが判明されています。それによれば、むかし信濃の国（いまの長野県）に一人の僧侶がいて、彼は正式な僧侶の資格である「戒」を受けていなかったので、東大寺にゆき、受戒をしました。すぐに信濃には帰らずに、どこかで修業をしたいと思っていると、西北のほうに山があり、その山中に小さな堂をたてて修業をすることになります。

その山が信貴山です。ただし、信貴山という固有名詞は絵巻の第二巻にならないと出てきません。その山のふもとに一人の長者がおりました。本来ならば、僧侶は山をおりて托鉢をして食物を乞うのが普通ですが、この僧侶の鉢は空を飛ぶという不思議な力をもっており、いつもその鉢のおかげで、僧侶は山中にいるままにして施し物を得ることができたのです。

ところが、ある日のこと、異常事態がおきました。いつものように鉢を長者の倉に飛ばしたところ、下人がその鉢を倉に置き忘れてしまったのです。すると、鉢はかってに校倉の錠をはずし、飛び出してきます。

絵巻の画面のほうは、この場面から始まります。

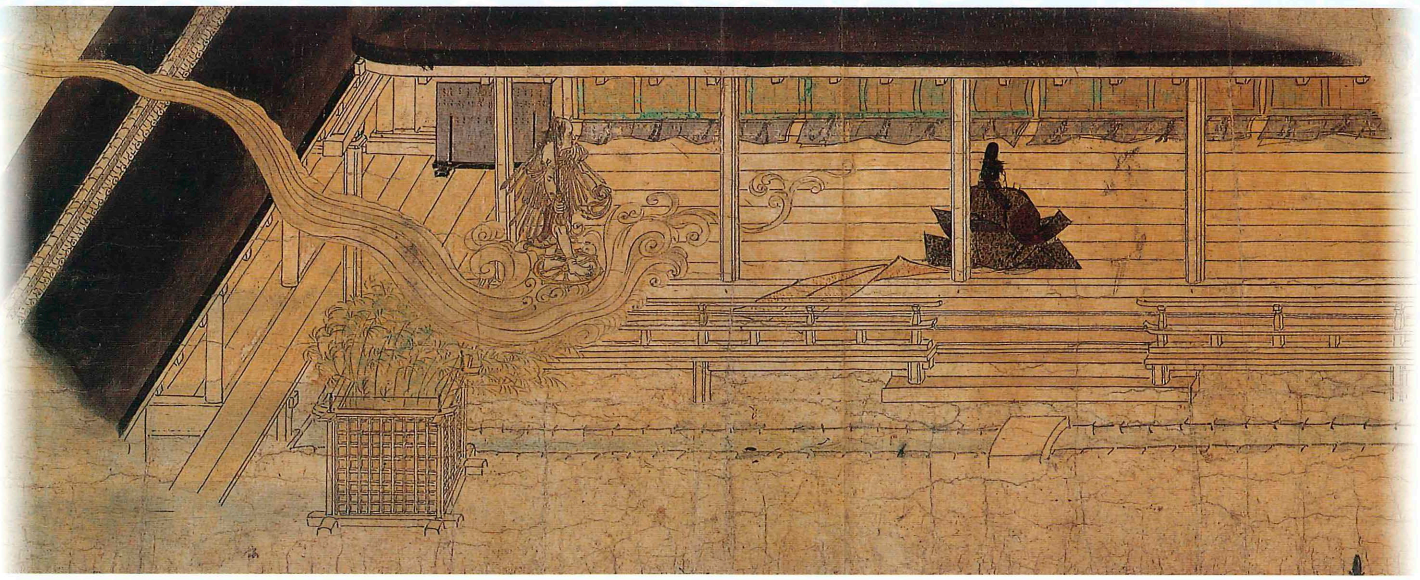
長者の家では大騒ぎです。倉の屋根からは瓦がくだけ落ち、その倉を鉢が引っ張るように空中に舞い上げてゆくのだから大変です。空を見上げながら一散にかけだす人びと、召使も巫女も旅人も、馬に跨ろうとする長者もいます。その頭上を倉と鉢は飛びつづけ、その先には大河があり、水面には浅葱色の波がただよい、金色の鉢が対照的に浮かび上がっています。やがて霞とともに木立があらわれ、しだいに風景は山中へと入り、山上の僧房にとゆきつきます。

その庇の板敷には、すでに到着していた金色の鉢があり、ここでこの絵巻の主人公である僧侶（命蓮）が登場します。追ってきた長者と従者たちもおり、鉢とともに山上まで飛んできた倉の前で、従者の一人が僧侶の命で米俵を鉢の上にのせようとしています。不思議なことに倉からは次の米俵が動き出しており、倉の側面からは米俵が列をなして舞い上がっています。時間の推移と空間処理を同時に表現する、絵巻ならではの面白さがここで見られ、まさに圧巻といえます。

それから物語は、ふたたび長者の家にもどります。倉のあった敷石のうえに米俵をのせた鉢が山頂から舞い戻り、次から次へと列をなして米俵が帰ってきます。人びとはふたたび驚き、恐れおののくところで第一巻は終ります。

全巻をとおして、この絵巻にはゆるぎのない画面構成、たくみな線描と色彩技法があり、そこに尽きることのない美的発見が秘められています。

場面を変化させるための舞台装置ともなる建築描写、波のうねりのように流動する山岳風景、静止する鹿たちが生む劇的効果など、その細部を見れば見るほどにわれわれの知的好奇心は高まってゆきます。



第二巻　延喜加持の巻

全長一二八〇・五センチの第二巻は、一変してかなり長い詞書から始まります。

最初の五行だけは第一巻の話の後半の出来事を述べていますが、すぐに話は第二巻へと入ってゆき、醍醐天皇の発病という導入部に入ってゆきます。

延喜時代のことで、時のみかどであった醍醐天皇が重病にかかり、いろいろな修法や祈祷をこころみたものの効果がありません。そのような時に、大和の信貴山というところに僧侶（「ひじり」とのみ書かれたままで、命蓮という名前は第三巻になるまで出てきません）がいて、山中にこもったまま鉢を飛ばして霊験をおこなうので、その僧侶を宮中に召して御病気平癒を祈祷をさせようという話がもちあがります。

第一段の絵のほうは、その僧侶を迎えにゆく勅使の一行が堂々たる内裏の東門をまさに出ようとする情景から始まります。六位の蔵人の正式な服装をした勅使、水干や狩衣の従者たち、法服の護持僧とその従僧、童男、門の前の牛車、黒牛や牛飼いの男など、当時の都の中心部に見られた風俗的情景が的確に描かれております。続いて、勅旨が馬上の人となって大和にむかい、画面の奥に消えてゆきますが、その空間的変転をやや長い霞でもって表現しています。

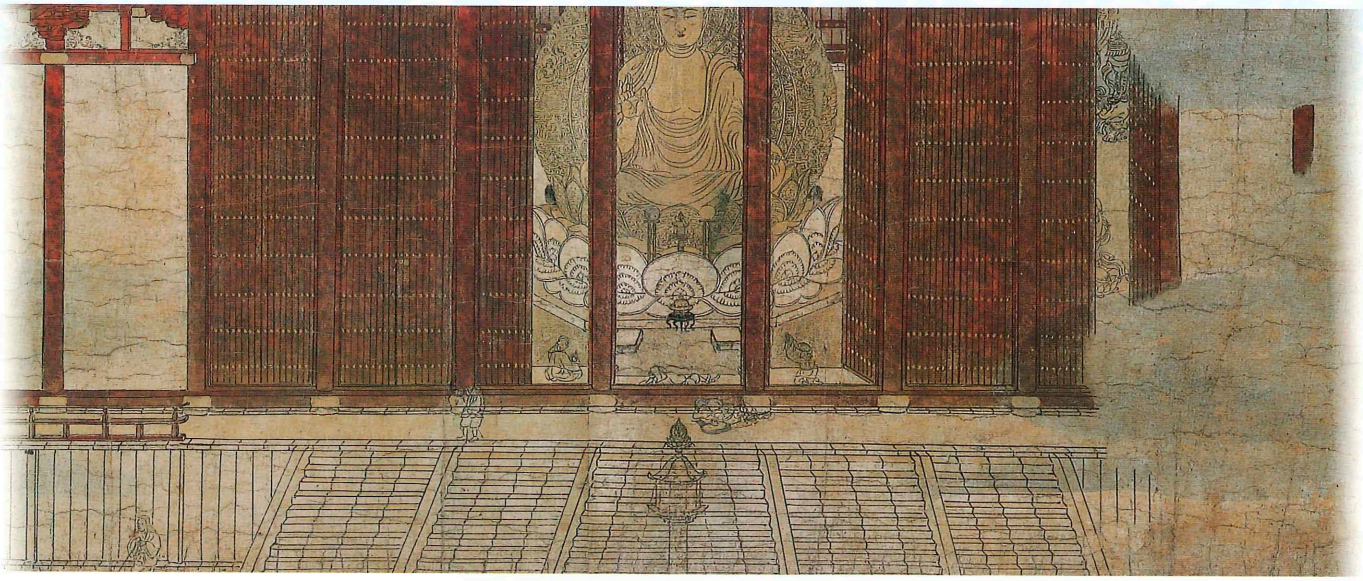
やがて勅使の一行は信貴山上の僧房にたどり着きます。勅使は、おごそかに宣旨を僧侶につたえます。しかし、宮中に上がるようにという天皇の命令にも、僧侶はいっこうに動こうとしません。ただし僧侶が言うには、この山中で天皇のために祈祷をしてさしあげましょう。その祈祷が終れば、天皇の御病気もなおります。法力の証しとして「剣の護法」というたくさんの剣を身にまとった童子をつかわしますから、そのすがたが天皇の夢に現れれば、法力がかなったことなのです。

画面は一転して、都の清涼殿の東面に移ります。信貴山からもどった勅使の蔵人が二人の廷臣にことの首尾を奏上しています。二十二行にわたる第二の詞書がここで挿入されます。後半部への興味を盛り上がらせるには、絶好のタイミングといえます。

第二段の詞書の冒頭で、三日ばかりあとの、ある昼ごろに天皇がまどろんでいると、きらきらと光るものが見えた。まぎれもなく「剣の護法」らしい。その瞬間に天皇の気持がさわやかになり、苦しみもなくなってすっかり御病気が平癒したという内容が記されています。その効力に感服した天皇は、ふたたび勅使を信貴山につかわし、高い官位や、荘園寄進などの恩賞をもちかけますが、清廉潔白な僧侶はすべての申し出を固辞して受け入れません。

第二段の絵は、ふたたび清涼殿の正面から始まりますが、後半のクライマックスは、やはり長い雲脚とともにさっそうと「剣の護法」の童子が登場する場面です。右手に剣を、翼のようにきらきらと輝く多数の剣を背中になびかせ、仏法の力を象徴する金色の輪寶の上に立つ童子の様相は、護法の効力という奇跡実現のスピード感を感じさせてくれます。下方にはのどかな山野や民家が対照的に配置され、画面にいっそうの緊張感をあたえています。

第二巻は、巻頭と同じように勅使の一行の信貴山行きでしめくくっています。季節はいつしか秋になった時間的推移が情趣豊かに山景の随処にほどこされ、墨による強弱肥痩のある線描が、その勢いで勅使や僧侶という主役以外の脇役たちを情況に応じて個性的に描き分けており、平安時代になって成立した日本美術における写実主義を看取することができます。



第三巻 尼公（あまぎみ）の巻

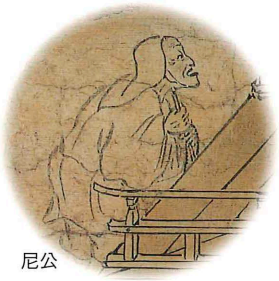
この巻は、絵巻全三巻のうちでもっとも長く、全長一四二四・二センチメートルもあります。僧侶とその姉である尼公との再会物語といった趣のある内容で、姉弟愛に溢れた感動的な物語ともいえます。また、信濃路から春の大和路へと旅する、当時としてはめずらしい紀行絵画という側面と、そこに記された地方色や村落の情景という記録性も無視できません。

実弟である僧侶が都で名声を博していく一方で、信濃に一人のこされた尼公は、東大寺で受戒をするといって家を出たまま二十年も消息の知れない弟のことが心配でなりません。そこで都にのぼって弟をさがしてみよう、

命蓮

とまず奈良にゆき、山階寺（興福寺）、東大寺をたずねます。ここで初めて姉の口から「命蓮」という名前が出ますが、誰も命蓮のことを知るものはいません。しかたなく尼公は東大寺の大仏の前にこもって一晩中一心に祈ります。

ここでは大仏殿の威容が印象的です。現在の大仏殿よりはひとまわり大きい大建築の有様が正面から描かれています。大扉には金具が光り、長押上の壁の唐草模様、扉のあいだからのぞく金色の大仏のすがた、など天平創建以来四〇〇年あまりの大仏殿の全容をつたえてくれます。この建物は、一一八〇年の平重衡の南都焼討で全焼してしまっただけに、焼失以前の貴重な画像ともなっています。



尼公

明け方ごろに、ふとまどろんでいると、そこに大仏のお告げがあり、捜し求める命蓮が紫雲のたなびく西南の山にいることを知ります。朝になり、西南の空を眺めるとその山が見えます。尼公はよろこんで山に向かいます。

尼公が山頂の僧房に近づき、おそるおそる「命蓮はいますか」と声をかけると、屋内から命蓮が出てきます。思いがけない再会におどろく弟に、姉は「どんなにか寒い思いをしていらっしゃることでしょう」と言って、懐から土産の「たい」（衲。厚い布地でつくった僧衣）を差し出します。この巻のなかでもっとも感動的な再会の場面です。

それまでは粗末な紙布一枚を着ていただけに、命蓮はその後も永年にわたってこの贈り物を大切にし、いつも紙布の下につけて修業しました。尼公も信濃に帰ることなく、この信貴山で命蓮に協力しながら日々修業をつづけました。こうした姉弟のしずかな、愛情に満ちた生活ぶりが、仏前を整える尼公や読経する命蓮のすがたをとらえて具体的に描かれています。　しかし、その「たい」もいつしかぼろぼろとなり、その端切れは鉢に乗って飛来した倉（飛倉）に納められ、やがて人びとはその端切れを少しでも求め、お守りとするようになりました。また、飛倉もやがて朽ち果て、その木片で毘沙門天の像をつくると、かならず福運を得るという毘沙門天信仰が生まれ、こうして命蓮の法力が招来した毘沙門天は信貴山の本尊となります。聖域にふさわしい複雑に重なる山々、その彼方に飛び去る雁を追うかのように、この三巻の絵巻は集結します。

同一画面のなかに時間経過をふくませながら、個人の表情と動作を心理的にとらえた闊達な人物描写、山肌の深い緑や青、紫の雲、銀灰色の霧などの流麗な自然描写、大仏殿の大胆で、かつ細部の緻密な建築描写など、画面全体を縦横に活用した構成力は驚嘆に価します。説話のそれぞれの主題展開を平明に絵画化したこの絵巻は、まさに新しい絵画様式のみごとな開花を示しています。

体裁・造本

山崎長者の巻
巻子表紙――蔓唐草紋様　新緞子　巻緒――正絹組紐

延喜加持の巻
巻子表紙――小花唐草紋様　新緞子　巻緒――正絹組紐

尼公の巻
巻子表紙――影唐草紋様　新緞子　巻緒――正絹組紐

共通仕様
桐　箱――会津桐　三本入り　印籠仕上げ　たとう付き
鬱金包裂――各巻毎一枚
軸　先――なら材花梨色塗装
軸　木――吉野杉
見返し――金砂子

題簽――秋山光和　筆

解説――百橋明穂

百橋明穂（どのはし　あきお）
昭和二十三年生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。昭和四十九年に同大学院修士課程修了。奈良国立文化財研究所、奈良国立博物館を経て、昭和五十六年神戸大学文学部助教授に就任。文学博士（東京大学）。現在、神戸大学文学部教授。
著書に、『仏教美術史論』（中央公論美術出版）、『仏伝図』（至文堂）、共著に『世界美術全集東洋編4隋唐』（小学館）などがある。

企画製作――トッパン・フォームズ株式会社
企画協力――ＭＢＭグループ
刊　行――丸善株式会社出版事業部
本体価格――三〇八、〇〇〇円（消費税別）
ISBN4-621-04974-7 C1371

お問い合わせ先
Ⓜ MARUZEN-YUSHODO
丸善雄松堂株式会社　学術情報ソリューション事業部 開発部　〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10
Tel: 03-3357-1449　Fax: 03-4335-9419　Email: archives@maruzen.co.jp　http://myrp.maruzen.co.jp/